

朝の森（7月下旬）夜の森（8月下旬）

目黒区立ふどう幼稚園（東京都目黒区）

園が率先して地域の環境である林試の森公園の自然を保護者と共に行う活動に生かしていく中で、保護者の心を揺り動かすことが大切だと考えた。普段はなかなか経験できない、朝の森や夜の森を味わう機会をつくり、自然とかかわる楽しさや素晴らしさ、味わい深さなどを感じ取れるようにしていた事例

<朝>

朝6時、出会いの広場に次々に子どもたち、お母さんやお父さんたちが集まってきた。ねむそうな顔も、友達と出会ったとたんうれしそうな笑顔に変わる。いよいよ森の探検に出発だ。

幼児コーナーを通り抜け、ジャブジャブ池の横を通って階段をのぼると、一面に白い花が落ちている。見上げると大きなサルスベリの木。サルスベリの花がハラハラと舞い落ちている。ユーカリの木の下に到着。前日に教師が仕掛けておいたトラップを見て回るようになった。

クヌギの木の下は・・・何と掘り返されていた！

木立ちの中は・・・何もいない！ああ、どうしよう。

クリの木の下は・・・やった！いた。大きなオサムシが一匹！

トラップを見て回った後は、お気に入りの場所でしばらく遊ぶ。さっそく虫を探す、木の根っこを掘り返し綱引きのようにして遊ぶ、セミの抜け殻を見つけてそっと手に取るなど、様々なことをして楽しんでいた。

田中先生（林試観察会主宰）は、森を歩きながら時々足を止め「おや、この木はどうしたんだ？いつの間に枯れてたんだ。そうか・・・。」と木に話しかけている。田中先生のそばには小学生のお兄さんやお姉さんたちがいて、興味深そうに聞いている。気が付けばもう7時。朝ごはんの時間だ。「また森で会おうね！」と手を振って別れた。

<夜>

夕方7時、出会いの広場にみんなが集まってきた。

久しぶりに会う喜びで、とてもうれしそうな子どもたちは、用意してきたビンに針金を巻き付け模様を描きビンカンテラを作り始める。はじめに作ったお父さんが「作り方教えましょうか？」と皆に呼び掛け助け合ってカンテラができていった。

薄暗くなった空を見上げると何かが飛び交っている。「スズメかな？」「ちがうよ」「もしかしたらコウモリ！」「コウモリだ！」と口々に情報が飛び交う。目を輝かせて空を見上げていると、期待通りにまたコウモリが姿を見せてくれて大歓声が挙がった。

田中先生から、「赤い布を棒につけて見せるとコウモリが寄って来るよ」と教えてもらった。靴を投げてもコウモリは寄って来るそうだ。

さて、いよいよ夜の森探検に出発。ユーカリの木の下まで、3方向に分かれて行く。途中で木をのぼっているナメクジを見つけて「すごいなあ」と観察していると、「何をしていますか？」と話しかけてきたお兄さんがいた。クワガタの居場所をよく知っているという近所の方で、特別の場所に案内してもらおうという貴重な体験もできた。

ユーカリの木の下に集まる。皆を大きな木と虫たちの鳴き声を取り囲んでいる。「森の妖精たちは、みんなが来てくれたことをとても喜んでいるようですね。ほら耳をすましてごらん」と園長が語りかける。目を閉じた皆の耳に、虫たちの声、木々のざわめきが聞こえる。不思議な気持ちがみなぎってくる。

大きなロウソクに火をつけ、カンテラに火を点し野草の小道に入っていく。

草むらの中をロウソクの明かりを頼りに歩く。ほのかに明るく優しいロウソクの光は、懐中電灯の強烈な明かりとは随分違う。自然の中に柔らかく溶け込む心に染み入る明かりだった。お母さんやお父さんの手をしっかりとぎりしめて歩く。昼間とは、全く違う場所のように思えてくる。

ゆっくり道をたどっていくと、白い布をひるがえしてあやしい魔女が現われて、みんなに何かを告げようとする。森には魔女も住んでいるのかもしれ



ない・・・。「もう一回!」「今度は一人で行くよ」という声も飛び出し夢中になって過ごしているうちに時計は8時30分を回っていた。

最後に田中先生の話聞いた。「森が無くなれば人間も滅びてしまう」という大切な話だった。

「おや、虫の声が小さくなってきたね。森にはね、いろいろな虫の時間があるんだよ。今度は、カブト虫やクワガタの時間なんだよ。カブト虫君、もう出てきていいよ!」と虫たちに呼びかける先生の話聞きながら、虫たちの大事な時間を分けてもらっていたのだという思いがわいてきた。夜の森で木々に囲まれながら聞いた話は、少し難しい所もあったかもしれないが、子どもたちの心の中に、そして大人の心の中に深く残っていったのではないかと思う。

夜が一層深まり、静まっていく中、親子はそれぞれに帰路についた。

<実践を振り返って>

- ・自然は、季節や時間帯によって、その表情を大きく変える。朝や夜の森を体験させたい、という願いは保護者の協力を得ることにより実現した。幼児にとって、また大人にとっても、朝の森や夜の森はふだん経験したことのない体験だった。暗闇や降るような虫の音を味わったこと、カンテラの柔らかな光など、心の奥深くにしみいる体験を親子で共通にもつことができた。幼児と同じように驚き、耳をすまし目をこらすなど、保護者の心を揺り動かす経験が大切であると考え。
- ・田中先生を講師として招いたことで、虫や木の名を知ることができただけでなく、自然が身近な場所にあることの大切な意味を知ることができた。幼児たちに伝わるやさしい言葉で語られていたが、それはそのまま保護者や教師の心に深く残る内容だった。保護者自身も幼児と共に朝や夜の森を体験したあとただただに、一層心に響いたのではないかと思う。このような機会をつくっていくことが、保護者の理解を得ていく上で大切であると考え。
- ・森でしたいこと、幼児に経験させたいことのアイディアを保護者から集めたり、実現のための協力を求めたりすることで、さらに幼児の経験が豊かになり保護者のかかわりや意識がひろがるのではないかと考える。

「保護者と共に森の活動を豊かに展開する」中で育ったこと

- ・朝の森や夜の森の体験を通して、幼児と保護者は、一緒に耳をすまし目をこらし、自然の不思議さや素晴らしさを味わうことができた。自然観察員や地域の有識者の方を講師に招くことで、保護者の知的欲求を満ちし豊かな情緒を味わう機会をつくることができた。これらの体験を通して、保護者の心を揺り動かすことが、保護者の森に対する思いに広がりや深まりを生みだし、森での幼児の経験を深く読み取る土台となる。

みどころ

朝の森の探検は、サルスベリの白い花や大きなオサムシとの出会いがあり、保育者の用意したトラップでさらに探検が進んでいます。いつもと違う雰囲気の中で、いつもと違う森を感じて、「朝ごはんの時間だから」といつもと違う別れ方をしました。夜の森はどうでしょう。準備されていたビンでカンテラを作り、探検に出発しました。早速出会ったのは、コウモリ、そして、大きな木と虫の声を聞き、不思議な気持ちを味わいます。こうした、いつもと違う緊張感のある環境で、様々な感覚を研ぎ澄まして探索を楽しむことで、幼児らしいイメージの世界だけでなく、講師の方の「森が無ければ人間も滅びてしまう」という話も心に響いています。知らなかった森を全身で実感した親子の活動は、貴重な共通の体験になっています。保護者は、幼児が日常とは違う自然にかかわり体験したことの大切さや幼稚園の教育への理解を深めることができました。家庭生活でも生かされることが期待できます。